

出発。でもなぜなのか五、六人の戦友が残された。心残りだったが、致しようもなく残念だった。

五月十一日ナホトカ港に着く。そして五月十三日ナホトカ港前方に日の丸の船が見えて来た。船腹に遠州丸と書いてある。これを見た時の喜び、飛び上がって喜んだが、凍土に散った友を思い、手を合わせた。

五月十五日舞鶴港に上陸と同時に検疫を受け宿舎に入り、色々と手続きを済ませ、お互いが亡くなった戦友、残された戦友の話をしながら日本の夜を迎えた、戦友の安かれを祈りつつ。

五月十七日なつかしの滋賀の里へ帰郷した。

抑留記

京都府 長 曾 修

当時の住所京都府船井郡園部町から、昭和十六年二月二十一日、現役召集で満州国黒龍江省佳木斯^{ソウマース}の関東軍独立守備隊四四一部隊へ入隊しました。極寒零下四

〇度の北満で厳しい初年兵教育を受けました。

その後、ソ連との国境付近にある同江、富錦、鶴崗などの警備についていました。

昭和二十年八月十五日終戦。八月十八日、佳木斯においてソ連軍により武装解除されました。

十月中旬、アムール河を渡りソ連のハバロフスクに入りました。

新京、奉天方面は国民党軍と中共軍が戦争をしているので日本兵はウラジオストク経由で日本へ帰されるのだというデマにだまされて、四年間もソ連復興の手助けをすることになった次第です。

ハバロフスクの北方イズベストコーワヤという森林地帯の収容所で三百余人が毎日山に入り伐採と運搬です。亭々とそそり立つ大木を二人引きのこぎりですり倒します。轟音とともに倒れる凄まじさは恐怖あるばかりです。これを運べる長さに切って製材所へ運ぶ作業が二年半毎日毎日繰り返されました。

この作業のノルマが厳しく、腰近くまで雪が積もっても警備兵にダワイ・ダワイと追い立てられます。食

糧は少なく、朝も夕食も飯盒の蓋に八分目ぐらいの雑穀の粥、昼は黒パン一切れでは、こんな重労働は続きません。毎日のように一人二人と死んでゆきました。

医務室とか病院があるわけでもありませんから、風邪をひいて熱があるうが、栄養失調でフラフラになっ
いても「ヤボンスキ、ダワイダワイ（日本兵早く仕事しろ）」と、地獄の鬼もかくやと思うばかりです。この材木は製材所で枕木に仕上げて独ソ戦で破壊された鉄道復旧に送っていたようです。

昭和二十三年四月、一カ月間ハバロフスクへ民主教育の講習を受けに行きました。敗戦で混乱している日本を共産化するため帰還する兵隊を教育するのです。講習を卒業すると十人あまりナホトカへ転任を命ぜられました。

ソ連各地から日本帰国のため兵隊が続々とナホトカに集まり二週間程船を待つ間に民主教育をたたき込むというわけで、ソ連将校が計画書を作っていました。天皇制反対、資本主義反対。資本家は労働者を搾取して、安い賃金でこき使い、利益は懐へ入れるばかりで

出そうとしない。共産主義こそ働いた分を公平に給料が支払われるもので搾取する者はいない、団結せよ、赤旗のもとへ。

兵たちは帰国を目前に控えて民主教育などどうでもよいのだが、反抗して山送りにでもなつては大変だとおとなしく話を聞いていた。

思想改造（？）された兵たちは続々とナホトカを出航し舞鶴へ帰ってゆき、そして働いていた部隊が次々と入ってきました。このような活動が一年半ほど続きました。ソ連に抑留されていた日本兵は大体帰国した様子で、残されているのは五年とか十年とかの刑を言い渡された人々だけでした。

昭和二十四年十月二日、舞鶴港に上陸しました。二度と祖国の土を踏むことはできないかもわからないと覚悟していましたが、今ここに五体満足で懐かしい山や河、村や街を見ることができた歓喜がふつふつと体の底から吹き上がってくるのを感じました。

現住所 京都府船井郡園部町新町八四

生年月日 大正九年三月十日